

*Entamoeba dispar*の150-kDaシステインリッチ表面蛋白質の解析橋 裕司¹ 程 訓佳¹ 小林 正規² 竹内 勤²東海大学 医学部 基礎医学系¹ 慶応義塾大学 医学部 熱帯医学・寄生虫学教室²

*Entamoeba dispar*は、赤痢アメーバと形態的に鑑別困難であるが、病原性のない腸管寄生アメーバである。両種間の差異を解析することは、赤痢アメーバの病原因子を明らかにするために、また特異的な赤痢アメーバ症の診断法確立のためにも重要であると考えられる。しかし、*E. dispar*は無菌培養が困難であることから、その解析は充分に行われていない。最近我々は、赤痢アメーバの虫体表面に、接着に関与すると考えられる150-kDaのシステインリッチ蛋白質 (Igl) の存在を明らかにし、*E. dispar*においても相同性の高い遺伝子をクローニングしている。そこで今回、*E. dispar*におけるIgl遺伝子の発現量について赤痢アメーバの場合と比較した。また、*E. dispar* Iglの抗原性についても赤痢アメーバIglとの比較検討を行った。

遺伝子発現量はアクチン遺伝子を対照とし、real-time PCRによって解析した。その結果、*E. dispar*における発現量は赤痢アメーバの約0.6倍であった。従って、Iglは病原性のない*E. dispar*においても必須の蛋白質であると推定された。さらに*E. dispar*のIglについて、N末端とC末端のシグナル配列を除く全長を大腸菌で産生させ、得られた組換え蛋白質と赤痢アメーバ症患者血清や赤痢アメーバIglに対する抗体との反応性を調べた。患者血清やポリクローナル抗体は*E. dispar* Iglに対しても反応し、両種のIglには共通のエピトープが存在した。しかし、赤痢アメーバIglのN末端あるいは立体構造を認識しているモノクローナル抗体は*E. dispar* Iglと反応せず、赤痢アメーバに特異的なエピトープの存在も明らかになった。我々は赤痢アメーバの組換え型Iglが血清診断用抗原として有用であることを既に報告しているが、*E. dispar*と抗原性の異なる部分に着目することで、より特異性の高い赤痢アメーバ症診断法を確立できると考えられる。

Characterization of the 150-kDa cysteine-rich surface proteins of *Entamoeba dispar*

HIROSHI TACHIBANA

Dept of Infectious Diseases, Tokai University School of Medicine, Isehara, Japan